

研究ノート

近代幼年雑誌『幼年少女』における表紙に関する考察

田中 卓也**・中澤 幸子**・佐藤 寛子***

日隈 美代子****・柳生 明子*****

The consideration of “YOUNEN YOUJO“ of cover sheets transitions
in their childhood magazines in the modern era

Takuya Tanaka, Sachiko Nakazawa, Hiroko Satou,
Miyoko Higuma, Akiko Yagyu

要約

本研究は、博英社（東京）より、1924（大正13）年ごろに発刊されていた幼年雑誌である。『幼年少女』（全96ページ、1冊30銭）をとりあげ、両誌の誌面構成はもちろんのこと、表紙の変遷に着目し、その特徴を見出すものである。同誌は、表紙に幼年の頃の男子および女子を採用しており、かわいらしく、あどけない表情の子どもが描かれている。そこから「上流家庭の子ども」を描こうとした出版社の意図がみえる。

かくして両誌は、比較的安価で入手可能な幼年雑誌として発売されていくものの、講談社や博文館といわれる大手老舗雑誌社の雑誌の爆発的な売れ行きに押され、やがて廃刊の憂き目にあっていくことになった。同誌は昭和に発刊された絵雑誌にも大きな影響を与えていくことになった。

キーワード：『幼年少女』， 絵雑誌， 表紙， 読者， 大正自由教育

Key Word: “YOUNEN YOUJO”, picture magazines, coversheet, readers of the magazines, Freedom of education in taisho era

- I. はじめに—本研究の目的と先行研究の検討—
- II. 雑誌の表紙が際立った明治末期から大正期という時代
- III. 『幼年少女』という雑誌
- IV. 表紙絵担当の小林永二郎
- V. 他誌と異なる表紙テーマへのこだわり
- VI. 大正自由教育の終焉
- VII. おわりに—『幼年少女』の廃刊—

* 本学経営学部教授
** 本学経営学部准教授
*** 本学経営学部専任講師
**** 本学経営学部助教
***** NPO法人越後妻有里山協働機構

I. はじめに

— 本研究の目的と先行研究の検討 —

本研究では、1924（大正13）年から発刊された『幼年少女』誌をとりあげ、同誌の表紙の変遷を追いながら、その特徴を、見出すことに努めたいと考えている。

なお、本研究は「明治・大正期における日本の幼児雑誌の表紙の変遷と幼児像の形成に関する研究」（田中卓也、中澤幸子、佐藤寛子、日隈美代子、柳生明子、「2019年度静岡産業大学特別研究支援経費」）の助成を受けた研究成果の一部である。

II. 雑誌の表紙が際立った明治末期から大正期という時代

松本育子・土居安子「大正期における児童出版文化史の研究」のプロジェクトによれば、老舗出版社の一つでもある、実業の日本社発刊の『少女の友』（1908年～1955年）、『幼年の友』（1909年～1931年）、『日本少年』（1906年～1938年）についてとりあげながら、その編集部も表紙に力を注ぐことになった。

『少女の友』では編集主筆の内山基のときが最盛期であるといわれ、中原淳一を起用した情緒的かつ感傷的な少女を表現するといった技法が目立つものであり、また松本かつちによるストーリーのあるマンガの掲載など読者には印象付けられるものが多く採用されていた¹⁾。

また『少女の友』に描かれている少女らは、感傷的で抒情的な一面をもつが、大正期に勃発した第一次世界大戦の影響も存在し戦時体制の雰囲気を感じだすことも少なくなかった。しかし実際の戦場に赴くのは少年兵のように男性であるため、直接的には反映されていない感もある。同時期に発刊されていた「大

日本雄弁会講談社」（現在の講談社）の『少年倶楽部』や『少女倶楽部』と比べ、戦時色もそれほど目立たないものである。

また『幼年の友』においては、表紙に描かれているように、「幼児の顔」に重点が置かれることになった。幼児ではあるが、髪型と服装を変えたりしても、全く性別を感じさせない丸顔でふくよかなものであったように見受けられる。またどの顔も人形のような様子が漂ってくるものである。むしろ「幼年」は「少年」、「少女」とは異なり、「かわいいお人形」のようなものとしてとらえられるようなものであったことがうかがわれる。

III. 『幼年少女』という雑誌

大正自由教育の影響が廃れ始めた大正末期に発刊されたのが、『幼年少女』であった。同誌は、東京の博英社から発刊された。同誌第1巻第1号の刊行は、1924（大正13）年5月であった。

発刊された時期は、大正末期であり、大正自由教育が衰退していく時期と重なっていた。

「幼年少女」という雑誌タイトルからもわかるように、表紙にはかわいらしい男の子と女の子が2人描かれている。際立つ目とふくよかな肌、「幼年」を彷彿させるようなあどけない表情などが満面に描かれている。大正自由教育が廃れはじめ、新教育運動を信奉する者（小学校教員などをふくむ）らを逮捕、追放したりする時期であったにもかかわらず大正自由教育を最後までとどめおこうとする意欲を感じさせるものになっていたことであろう。

1) 松本かつちは、画家および漫画家で知られており、博文館の雑誌のカットを描くアルバイトを経験したことが、のちに挿絵作家の道を切り開くことになったといわれる。のちに中原淳一と人気を誇ったことは有名である。『少女画報』、『少女倶楽部』、『令女界』等で少女の心を虜にするような作風で人気を得た。1986（昭和61）年に82歳で逝去した。

2) 『小学男生』という雑誌は、実業の日本社から発刊された小学生男子を対象とした雑誌であった。なお姉妹版として『小学女生』も出版されている。田中卓也「児童雑誌『小学男生』における読者意識の形成」（広島大学教育学部日本東洋教育史研究室、口頭発表済、2008年5月）を参照されたい。

IV. 表紙絵担当の小林永二郎

『幼年少女』の表紙は、小林永二郎が担当していた。小林永二郎という人物がどのような人物であったのかについては、執筆者の調査からはいまだ判明していない。小林は、同誌の表紙を担当しただけではなく、『小学男生』(実業之日本社)や『少年少女譚海』(博文館)の附録「宝島探検雙六」、『少年世界』(博文館)の「大正少年双六」の絵についても担当していたことがわかっている²⁾。なお『少年世界』の「大正少年双六」については、佐々木林風との共作である。

「大正少年双六」は、1915(大正4)年の作であるとされ、前年に起こった第一次世界大戦に日本が参戦したことも影響していた。「学生同士が敬礼する姿」、「義勇少年」、「飛行機製作」、「国旗」などから双六を以てして、児童らの戦争への意識の形成さらには高揚を求めるようなものであったものとうかがえる。

また「一日一善」、「鉄棒」、「外遊び」、「スケッチ」なども見られ、子どもの日常生活や遊びなど、子どもらしい一面をのぞかせる作品となっていることについても読み取れる。小林は、その後も「少年野球優勝争奪双六」(実業之日本社『日本少年』1923年)、「飛行漫遊双六」(『少年少女譚海』博文社、1926年)など、双六の画家としての活躍が見える。

V. 他誌と異なる表紙テーマへのこだわり

『幼年少女』の表紙はおおまかであるが、テーマが存在している。表紙の絵では、幼少の男の子、女の子がともにやや上目づかいに中央を見ている様子が多く、また男の子も女の子も童顔であり、おしゃれ洋服を着こなしている。大正後期ごろからは、多くの幼年向けの雑誌が登場し始めるのであるが、表紙のテーマは日本の四季や年中行事、学校行事などにこだわったものが散見されることが多

い。なかには日本が対外戦争について繰り返され、戦争を意識した表紙になることも頻繁であった。

1909(明治42)年から1923(大正12)年まで10有余年発刊続けた博文館の『幼年世界』においては、発刊当初より、童顔でかわいらしい姿の幼児・児童が描かれているのであるが、1914(大正3)年から世界を股にかけて交戦した第一次世界大戦の勃発以降は、児童が兵器を持ち、いまからの戦いに備えるといった雰囲気を感じさせるものになっているし、1919(大正8)年に起こったシベリア出兵の時期においても、児童は戦時色を帯びた姿が描かれているのである。

講談社刊行の『幼年倶楽部』では、1925(大正14)年より発刊されているが、表紙のテーマは、戦時色をより濃いものして映し出す傾向にあった。とりわけ1931(昭和6)年より始まる「満州事変」を皮切りに第二次世界大戦まで続く「十五年戦争」を経験することになるが、表紙の絵においても、紙飛行機の製作や国旗振り、敬礼姿、軍服姿、サーベルなどが毎号のように掲載されていくなかで、軍事色を強めていく傾向にあった。

裏表紙においても兵器や銃砲販売、模型飛行機の製作実演などが所狭しと紹介されるほどの広告欄であったことから、雑誌の表紙は国内の政治の事情にオーバーラップすることがあることを示しているともいえよう。

『幼年少女』は他誌とは異なる路線を貫き、大正自由教育の雰囲気さながら表紙にそのまま反映させていたことが考えられる。雑誌の売れ行きはもちろん、出版社も気になる場所であるであろうが、出版社が「子ども中心主義」の時世であった大正期発刊の雑誌として継続発行していくために貫いた証であったのかもしれない³⁾。「上流家庭の子弟」と「華やかな雰囲気」は、同誌が表紙において最後まで譲れない大切なモットーなのであった。

3) 「子ども中心主義」は「児童中心主義」ともよばれており、西洋の新教育運動より影響を受けたものであることがわかっている。デューイやモンテッソーリ、エレン＝ケイらが代表的思想家である。

VI. 大正自由教育の終焉

大正期には、児童雑誌のみならず、児童文学の隆盛期であったといわれており、1918(大正7)年に赤い鳥社より発行された『赤い鳥』において文学が花開くことになった。編集人の鈴木三重吉をはじめ、泉鏡花や小山内薫、徳田秋声、高浜虚子、有島武郎、芥川龍之介、島崎藤村、小川未明、谷崎潤一郎、北原白秋、西条八十らを中心に集うなかで、「子ども中心主義」の思想に共鳴し、自由で闊達な文学を生み出していくことになった。

大正自由教育という名称があるように、このブームは、学校教育にも大きく波及することになった。新学校といわれるような特色のある私立の小学校なども設立されるようになり、経済的に裕福な子弟が通う機会も増加するようになった。

沢柳政太郎の創設した成城小学校や赤井米吉の明星学園、小原国芳による玉川学園、中村春二の成蹊学園、羽仁もと子の自由学園などが代表的である。私立学校が独自の教育方針・理念に基づいた自由な教育をするなかで、国立学校の付属小学校などでは新教育に基づいた子どもの個性や自主性、自発性を重んじるような教育実践が行われるようになった。

教育思想という点では、「八大教育主張」の講演が大きな影響を与えた。

樋口長一の「自学教育論」をはじめ、河野清丸「自動教育論」、手塚岸衛の「自由教育論」、千葉命吉の「一切衝動皆満足論」、稲毛金七の「創造教育論」、及川平治の「(分团的)動的教育論」、小原国芳の「全人教育論」、片上伸の「文芸教育論」が主張として展開され、全国の小学校教員らに大きな影響を与えることになった。

この風潮は児童生徒の自主性、自発性の尊重を意図するとともに、「協働自治」にみられるように学習そのものを生活の一部に落としこみながら教育内容や方法を固定化しないように工夫がなされていくことになった。

しかしながら、大正自由教育にも限界が訪れることになる。ひとつの理由としては、大正自由教育そのものについて、おもに富裕層の家庭に支持されたようであり、公立学校に

児童を通園・通学させるような家庭には爆発的に普及することはなかった。

小学校の就学率は90パーセントを優に超えていたが、農村地域などでは実用的な知識や技術が子どもたちには必要であったのであり、高度な学問や芸術とは疎遠にあった。

また当時の政府による弾圧の実施があげられる。大正末期には社会主義思想が国内に蔓延し、警戒心を強めた政府は、思想弾圧政策に踏み切ることになった。1924(大正13)年に起きた「川合訓導事件」では、教書が神聖なものであるとされ、教科書に書かれている内容そのものを否定した授業を行った川合は、長野県の松本女子師範学校附属小学校において、国定教科書を授業に使用しなかったことで厳罰に処せられ、休職に追い込まれることになった。

教科書は、天皇主義国家であった日本にとっては、国家観を注入するために都合のよい教材として扱われ、教科書をそのまま教えることが聖職者とみなされていた現場教師の専門職としての任務とみなされていた。すなわち子どもの個性や能力を引き出すための教科書ではなく、思想を注入するための教科書というのが当時の政府の味方であった。

これを機会に大正自由教育は一気に衰退の道をたどることになり、従来から実施されていた天皇中心主義国家の日本にふりだしにもどることになっていった。

大正自由教育にかかわった教員、教育実践家、思想家らは警察に検挙され、投獄される者も少なくなり、雑誌などに至っては、発禁処分が科されることも少なくなると、児童雑誌は相次いで、廃刊や休刊に追い込まれることになった。

VII. おわりに

— 『幼年少女』の廃刊 —

『幼年少女』は大正末期に、大正自由教育が終焉を迎えるとともに、元舞台から姿を消した。廃刊年は執筆者においても調査は行ったが、明確にわかる資料は見当たらなかった。おそらくはわずか数年で廃刊に至った可能性が大きいように推察する。

『幼年少女』の登場した頃には多くの絵雑誌も登場しており、1914（大正3）年には『子供の友』（婦人の友）、1922（大正11）年には『コドモノクニ』（東京社）が発売され、多くの児童から人気を博した。両誌ともに武井武雄、清水良男らを当時の著名な画家を採用し、絵をもって子どもらを夢中にさせた。さらに両誌は芸術的にも価値の高い芸術総合雑誌としての側面ももち、高い評価を受けることになっていった⁴⁾。

また人気のある少年雑誌が飛ぶように売れるようになったことも挙げられる。『少年世界』（博文館）、『少年倶楽部』（講談社）などが大幅な紙幅を割いた雑誌を発売し、独占状況となった。大正期に児童文学の先駆けとして販売された『赤い鳥』は、主筆の鈴木三重吉の罹病により、一時休刊を余儀なくされたが、1936（昭和11）年の鈴木本人の死によって、同誌は廃刊の憂き目にあうことになった。このことは大正自由教育の衰退につながり、日本は軍国主義に突き進むことになった。絵雑誌についても、『講談社の絵本』などが出版され、幼児や児童に好まれるようになった。同書の人気により、多くの絵作家が新たに登場し、絵雑誌が活気を呈することにつながった⁵⁾。

『幼年少女』は絵雑誌として出版された、男子、女子の区別を備えた、比較的早い時期から出版された絵雑誌のひとつであったと見て取ることができる。

主要資料・参考文献

- (1)『幼年少女』（博英社）、国立国会図書館東京本館および大阪府立中央図書館国際児童文学館所蔵。

- (2)中村悦子・岩崎真理子『コドモノクニ』（総目次・上巻）、久山社、1996年。
 (3)同『コドモノクニ』（下巻）、久山社、1998年。
 (4)鳥越信『はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅰ』ミネルヴァ書房、2001年。
 (5)『赤い鳥』（赤い鳥社、復刻版）。2009年、（DVD）大阪府立中央図書館国際児童文学館所蔵。
 (6)「表紙絵」（中原淳一ホームページ）（www.junichi-nakahara.com/gallery）
 (7)中川裕美『少女雑誌にみる<少女>像の変遷—マンガは<少女>をどのように描いたのか—』出版メディアバル、2013年。
 (8)中川裕美「戦時下における年少者の身体表現—『少年倶楽部』と『少女倶楽部』の表紙絵分析を通じて—」『大正イマジュリー』第13号、2018年。
 (9)平井紀子「日本のファッション誌：発祥と変遷」『文化女子大学図書館所蔵服飾関連雑誌解題・目録』（2005-2009）、2005年。
 (10)岡満男『婦人雑誌ジャーナリズム』現代ジャーナリズム出版会、1981年。
 (11)『日本の婦人雑誌』（解説編）、大空社、1991年。
 (12)今田絵里香「少女雑誌にみる近代少女像の変遷—『少女の友』分析から—」『北海道大学大学院教育学研究科紀要』第82号、2000年。
 (13)神野由紀「近代日本における少女的表象の生成について：商品デザインの考察から」『デザイン理論』第61巻、2013年。
 (14)田中卓也『『幼年の友』における読者意識の形成』『関西教育学会年報』第34巻、2008年。

⁴⁾ 武井武雄は、「童画」（童話に添えられていた子ども大正の絵をいう）の命名者として知られる人物であり、『コドモノクニ』をはじめとした雑誌の絵作家としての活動に専念した。同誌では創刊号のタイトル文字や表紙絵を担当し、のちに絵画主任の責任者を務めた。1983（昭和58）年に70歳で死去した。また清水良雄は洋画家、童画家としても知られ、黒田清輝や藤島武二に師事する。鈴木三重吉の創刊した『赤い鳥』では、創刊号より挿絵を担当した経歴をもつ。『赤い鳥』の全196冊中163冊の表紙を担当したことは

高い評価に値する。1954（昭和29）年にこの世を去った。なお岡本帰一、初山滋は同世代の画家としても知られている。

⁵⁾ 『講談社の絵本』とは、1936（昭和11）年から1942（昭和17）年までから豪華な絵本として少年・少女向けに刊行されたものである。現在の絵本に影響を与えたものとしても知られる。詳しくは永峯清成『“講談社の絵本”の時代 昭和残照記』（日本図書館協会、2014年）を参照されたい。

- (15) 松本育子「表紙絵からみた『幼年の友』の視覚表現—前身誌『改訂教育絵ばなし』を含めて—」『大阪国際児童文学振興財団研究紀要』第32号、2019年3月。
- (16) 高木佳子「1910年代の『子供の友』における画家の起用とその変遷—北澤楽天を中心に—」『大阪国際児童文学振興財団研究紀要』第30号、2017年3月。



『幼年幼女』(第2巻第1号) 表紙
1925年1月号 (新年特別号)



『幼年幼女』(第6巻第4号) 表紙
1930年4月号

※国立国会図書館デジタルコレクション所蔵。